恋人の大ピンチ！！がんばれコナン！

音符

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
恋人の大ピンチ！！がんばれコナン！

【Ｎコード】
Ｎ０３０５Ｆ

【作者名】
音符

【あらすじ】
コナンが哀に告白！？その後哀が誘拐されて・・・・・

第一話（前書き）

初めての連載だぁ！！カプリングはコ哀です。大丈夫な方だけ読んでみて下さい！！

第一話

コナンと哀はＦＢＩと協力して組織を倒した。だがＡＰＴＸ４８６９のデータは完全に消え去り、２人は元に戻れなくなった。そして、８年の時が流れた。

○。○。○。○。○。

朝、コナンと哀は一緒に登校していた。

「なぁ、灰原。・・・あれからもう８年経つんだよな・・・」

「ええ・・・ごめんなさい。貴方を元に戻せなくて」

「その事はいいって言ったろ？それに俺は江戸川コナンとして生きて行くって決めたんだ」

「工藤君・・・・ありがと」

「あのなぁ、俺が江戸川コナンとして生きるって言ったのもう忘れたのか？・・・工藤新一はもういねーんだよ。だから工藤君って呼ぶのやめろ」

「分かったわよ・・・江戸川君」

そんなことを話していると、学校に着いた。

○。○。○。○。○。

放課後

「灰原。ちょっといいか？話しがあるんだ」

「ええ、構わないわ」

コナンは哀を連れて屋上まで来た。

「・・・灰原」
「どうしたの？」
「・・・俺・・・・おめーの事が、ずっと好きだった。・・・俺と、付き合ってくれないか？」
「／／／えっ！？それ・・・ほんと？」
「ああ。ほんとだ。おめーの事が大好きなんだ」
「／／／・・・ありがと。私も貴方が大好きよ」

こうして2は恋人同士になった。

第二話

コナンと哀が恋人同士になって一週間が経った。
二人は毎日手を繋いで仲良く登校している。

○。○。○。○。○。

授業が終わり、二人は家に帰った。コナンは蘭が結婚したので探偵事務所を出て哀と一緒に住んでいる。

「ただいま。・・あら、博士？」
「ああ、博士なら急な学会で四国まで行って明後日まで帰らないって言ってたぞ」
「そうなの」

コナンと哀はソファーに向かい合わせに座り、コーヒーを飲んでいた。

「灰原・・・俺達・・恋人同士だよな・・？」
「そうよ」
「だから・・・その・・・・・・哀って呼んでもいいか？」
「クスッ・・・貴方って可愛いわね。いいわよ、哀って呼んでも」
「／／／あんだよ可愛いって！俺は男だぞ！！」

コナンはそう言うとフイと後ろを向いてしまった。
「そーゆう所が可愛いって言ってるのよ。・・・・・だめ・・？」
哀はいつもと違う甘い声で聞いてみた。コナンは後ろを向いたまま
「別にだめじゃねーけど・・・・・・・キスしてくれたらいいよ」

と言った。
「///もうっ！江戸川君てば」
そう言いながらも哀はコナンに近付き、目線を合わせるようにしゃがみ込んだ。そしてその唇にそっと口付けた。
「///これでいいかしら、江戸川君？」
「・・・・・・・」
コナンは黙ったまま後ろから哀を抱き寄せて自分の膝の上に座らせた。
「きゃっ！///なっ、何するのよ！！」
「・・哀・・・キスしてくれてありがとな。だから俺も・・・・・」
コナンは哀をきつく抱き締めると、哀の首元に口付けた。
「――――っ」
哀の身体がビクッと揺れる。
「///ちょっ！何したの！？」
「俺のもんだってゆう証を付けたんだよ。哀は俺だけのもんだ///」
「貴方って独占欲が強いのね」
「///わりぃかよ」
「別に。そんな貴方に惚れたんだし///」
そんなことをしていて一日が終わった。

第三話

次の日の帰り道、哀は一人で帰っていた。
理由はコナンが音楽のテストで追試になったからだ。でも哀の機嫌は悪くなかった。明日の夜まで博士が居なく、コナンと二人きりだからだ。

哀は、今日はコナンに特別美味しい晩御飯を作ってあげようと考えながら歩いていた。

そんな哀は、後ろから近付く怪しい影に気付かなかった。次の瞬間、哀は口にハンカチをあてられた。
「っ！！！！離しっ・・・・・・」
ハンカチにはクロロホルムが染み込ませてあり、哀はぐったりとなった。

男はニヤリと笑うと哀を車に押し込み去って行った。

○。○。○。○。○。

数十分後、コナンが家に帰って来た。
「ただいま～。・・哀？」
コナンが哀が居ない事を不審に思ったその時・・・・電話が鳴った。その瞬間、コナンは嫌な予感がした。・・・そしてその予感は的中した。

「もしもし。お前のとこのお嬢ちゃんは預かった。返して欲しければ明日の午後５時に米花公園に身代金五千万を持ってこい。無駄な

抵抗をすれば・・・・どうなるか分かるよな？」

そう言って電話は切れた。

「哀・・・必ず助けてやるから。・・待ってろよ！！」

○。○。○。○。○。

その頃哀は薄暗い建前の中で目を覚ました。

「・・・ん・・・んんっ！？（なっ・・何これ！？体が動かないし声が出せない！！）」

哀は必死にもがいたが、無駄だと分かり大人しくした。その時、誰が部屋の中に入って来た。

「お目覚めかい、お嬢ちゃん。お嬢ちゃんにはこれから身代金を貰う餌になってもらう。こっちへ来い。」

そう言うと男は哀を別の部屋に運んだ。そして哀の口にハンカチを宛てた。

「・・うっ・・（だめっ！！クロロホルム・・・江戸川君、助け・・て・・・・）」

哀は気を失ってしまった。

コナンは無事、哀を助け出す事が出来るのか！？

第四話

コナンは目暮警部に電話をして事情を説明していた。
「では、先に帰ったはずの哀君が居なくて不審に思っていた所に犯人から身代金要求の電話があった、という訳だねコナン君？」
「うん。ねぇ目暮警部、僕に身代金を持って行かせて！」
「うーむ・・・・よし、分かった。ただしくれぐれも無茶はしないように」
「分かってる」
「じゃあ頼んだぞ。我々も君の近くでちゃんと監視しているから」
「はい！！」

コナンは力強く答えた。

○。○。○。○。○。

その頃哀は・・・

「・・・ん・・・・・（あ・・そう言えば私、薬で眠らされてどこか別の部屋に・・・）」

意識を取り戻して自分の状況を把握していた。

その時部屋のドアが開いた。
「起きてたのか、お嬢ちゃん。だが明日の夕方までは大人しくしていてもらうよ」
そう言うと男は出て行った。
「（・・・江戸川君・・早く来て・・・！！）」

哀は心の中でそう叫んだ。

○。○。○。○。○。

翌日の午後、コナン達は身代金を準備して、阿笠邸で待機していた。

「そろそろ時間だな。コナン君、準備はいいかね？」

「うん！！」

「よし、じゃあ計画通りにやるんだぞ。なんとしてでも哀君を助けるんだ」

コナン達は米花公園に向かった。

○。○。○。○。○。

「そろそろ時間だ、お嬢ちゃん。俺は身代金を奪いに行って来る。・・・悪いがお嬢ちゃんにはもう少し俺に付き合ってもらう。だから大人しく待ってろ」

男は哀の口にハンカチをあてた。

「・・んぅっ・・・・！！（そんなっ！！・・・・江戸川君っ！！助けて！！！！・・・・）」

哀は気絶してしまった。

○。○。○。○。○。

米花公園ではコナンが犯人が来るのを待っていた。

そして犯人が乗った車が来た。

「おじさんだよね？哀を誘拐したの。哀はどこ？」

「残念だがここには居ない。もう少し付き合って貰いたくてね！」

そう言うと男はコナンから身代金を奪って逃げ出した。

「・・・くそっ！！哀・・・今助けに行くからな！！」

コナンはこっそり男の車に小型発信機を取り付けていたのだ。

コナンはスケボーで走り出した。

第五話

コナンはスケボーで街中を走っていた。

「哀・・頼む。無事でいてくれ！」

○。○。○。○。○。

その頃哀は此処から逃げ出そうと必死でもがいていた。

「うぅん、うぅ！（早く此処から逃げなきゃ！！でも縄が解けないっ！！）」

その時ドアが開いて男が入って来た。

「お嬢ちゃん・・・大人しくしてろって言ったよな？・・・・・どうやらお仕置きする必要があるみたいだな」

男はそう言いながら哀に近づいていく。

「んぅっ、ん～！！！（いやっ！！来ないで！！！）」

哀は更にもがくが、縄は解けない。

男は哀の正面でしゃがむと、哀の服に手をかけた。

（んっっ、ん～っ、んん！！！（いやっ！！やめてっ！！！！）」
哀の抵抗も虚しく、セーラー服のボタンを外されてしまった。
「へへへ。お嬢ちゃんいい体してるね。・・・ん？そこの首元についているのはキスマークか。相手はあの眼鏡のガキだな？あのガキお嬢ちゃんの事必死で探してたぞ」
男はニヤニヤしながらキスマークを触っている。
「んっ！！（江戸川君・・・助けて！！！！）」
「お嬢ちゃんには悪いが、その体あの眼鏡のガキのだけのもんにしとくのは勿体なくなったよ・・）」
男が哀を床に押し付け、襲いかかろうとした瞬間！！部屋のドアが吹っ飛び、男が倒れた。
ドアの先にはコナンが立っていた。
「んっんん～！！！！（江戸川君！！！）」
「哀っ！！大丈夫か！？今解いてやるからな！！」
コナンが縄を解き始めて数秒後、哀は自由になれた。
「江戸川君っ！！怖かったよお！！でも・・貴方が絶対助けに来てくれるって信じてたわ」

哀はコナンに抱き着きながら言った。

「哀・・・よく頑張ったな。・・・でも・・・・それより、あの・・服着て貰えないか？・・・それとも今此処で襲って欲しいか？」

「えっ・・・きゃあっ！！えっち！！！／／／／／」

哀は服を着ながら講義した。

「じょ、冗談だよ！！・・・・でも、いつかは・・・いいよな・・？」

「えっ！？／／／／あっ、当たり前じゃない／／／／／／」

そんな事を話している間に、目暮警部達が到着した。

「コナン君、哀君。二人共無事でよかったよ。」

その後二人は事情聴取をして帰宅した。

「哀・・・ごめんな。俺が一緒に帰っていればこんな事には・・・・」

「いいのよ。貴方が助けに来てくれたし。」

哀は微笑みながらそう言った。

「てゆうか哀！あの男に何かされなかったか！？」

「な・・・何にもされてないわよ。ただ・・・」

「ただ？」

「これを・・触られた・・・・」

哀は言いながらキスマークを指指す。

「んなっ！？そんなとこ触られたのか！？！？あの男俺の哀によくも！！」

コナンはまじでキレている。哀はそんなコナンを見てクスクス笑っている。

「貴方ってやっぱ独占欲が強いのね」

哀は笑いながら言った。

「／／／とにかくお前が無事で良かった・・・」

「江戸川君・・・ありがと」

チュッ

哀はそう言ってコナンにキスをした。

「／／／／・・・哀・・」

「／／／／／／今のはお礼よ」

哀は赤い顔をしてフイと後ろを向いた。

「・・・哀、やっぱ俺・・・・おめーの事が大好きだ」

「私もよ。あと・・・愛してる・・・・」

コナンと哀は見つめあうとお互いの口を重ねた。

「これからもよろしくね。名探偵さん？」

「ああ。よろしく」

哀とコナンは見つめ合い微笑んだ。

―ＥＮＤ―

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0305f/

恋人の大ピンチ！！がんばれコナン！

2010年10月25日22時12分発行